
流星のロックマン THE FINAL COMET

レッドジョーカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン THE FINAL COMET

【Nコード】

N1045W

【作者名】

レッドジョーカー

【あらすじ】

スバルが二百年前の世界から帰ってきてから三ヶ月。スバルは三学期の始業式に出席していた。しかしこの日から謎の人物の地球リセット作戦が始まっていたのだ。極限を越えそうな戦いのすえスバル達は何をみるのか。

プロローグ（前書き）

初めまして。コスモロックマンです。更新は不安定になりまとめて更新することが多くなりますがよろしくお願いします。

ブローグ

「某所……」

「フフフ……クハハハハハハハハハハ！！ついに、ついに完成したぞ！人類のリセット兵器が！！！！これで……これで……俺は………。アハハハハハハハハハハ。フハハハハハハハハハ！！！！！！！！」

その笑い声はいつまでも続いたという。

時は22年。電波による無公害エネルギーを使い、ハンターV Gという携帯端末を使って生活している時代。今日も大きな事件はなく平和に明日になる。そして、明日も平和のまま過ぎていく。そんな毎日は一人の英雄によって作られた。ロックマン。もはやこの単語を知らない人はいない。

第一話 変わらない日常（前書き）

まとめて更新っていったのにこの始末。

第一話 変わらない日常

「コダマタウン……」

『スバルー起きろー！』「……………」

『くそく相変わらず朝に弱ええくなあー！！起きろー！！！！！！』
「……………」

『くそつたれ！！さつさと起きろー！！！！！！』

「……………。ふあーああ……。おはよう。ウォーロック。」

『おはようじゃねえよ！！なんでお前は朝に弱えんだー！！』

「いや……。それは……………」

『なにがそれは……。だ！！毎朝起こす俺の気持ち考えろ！！』

「ごめん……………」

『それに、始業式に遅れるぞ！！！！』

「ええええええええ！！今何時！？』

『7：45分。』

「ええー！！！！早くしなきゃ！！委員長がきちやう！！」

委員長とは白銀ルナの事だ。

クラスの委員長をやっているのでそう呼ばれている。スバルは着替えて、ウォーロックの愚痴を聞き流しながらリビングに降りていった。

この日自分に降り掛かる災難を知らずに…………。

「おはよう母さん父さん。」

『おはようだぜ。』

「「おはようスバル、ロック君／ウォーロック。」「リビングでは、スバルの母と父がいた。」

あかねと大吾である。

大吾は新聞を読んでいて、いかにも父親のようである。

あかねは、大吾が食べた後の食器を洗っていた。

テーブルの上には、スバル用にご飯と味噌汁と焼き魚が、ウォーロック用にウィザーフード（ドッグフードのウィザード版）がのっていた。

「『いただきます。』」

いつの時代になっても変わらないこの挨拶と共に

「ガツガツガツッ」

『ガツガツガツガツ』

という音がリビングに響き渡る。

忘れていたかもしれないが、彼らは遅刻寸前なのである。

しかし、これは毎日の事なので彼らは気にしていない。

普通の人ならすごく慌てているだろう彼らは普通をこえているのである。

2つの意味で。

閑話休題。話をもどそう。

ピンポーン

「スバル〜。委員長さん達よ〜。」

「はい。今行くよー。」『つたく。食うのがおせなあ〜。』

「僕とウォーロックでは食べる物違うだろ！」

簡単に言えばご飯と焼き魚と味噌汁、コーンフ레이크では食べるス皮ードが違うと言う事だ。スバルは残った味噌汁を一気に飲み干し、ハンターを持って家を出た。

家の外には委員長、キザマロ、ゴン太がまっていた。「おまたせ。みんな。」

「スバル君。あなたいつもにまして遅かったわね〜。なんでこんな

に私達が待たされるわけ！！

ああ、こんな人が私の愛しのロックマン様だなんてしんじられないわ。

「あっはははは。」

スバルには笑う事しかできなかった。するとウォーロックが、

「お前らずっと話してるが時間大丈夫なのか？」

「「「「「！！！！」」」」」 「やばいよ。なんで早くいつてくれないの！！」」

「そっしょー！」

「そうですよ！」

「そうだぜ！」

「お前らがずっと話してるからタイミングが掴めなかったんだよ！」

全くその通りである。自業自得だ。

「とにかく早くしなきゃ本当に遅刻しちゃうよ!どうしよう!」

「どうしようもないわ！とにかく走るしかないでしょ！いくわよ！」

「うん」

「はい」

「ええ」

「ギン（殺気を帯びた目線）」

「……は……はい……（委員長やっぱ恐えええええ）。」

「いいわね、じゃあ行くわよ〜。」

「はい／うん／おう」

その後時間には間に合ったものの、息が物凄く切れていてクラス中の人にがんみされたのは言うまでもない。

第二話 始業式（前書き）

時間があつたのでかきました。

第二話 始業式

「ふぁーああ。」

欠伸をしたのはゴン太である。校長先生の長い長い話に飽きてしまったのだ。

「（こらー！！ゴン太！！欠伸しない！！みつともないでしょー！！）」

「はい。」

「（声が大きいー！！）」

「（あつ。はい。）」

委員長とゴン太が話しているといよいよ校長先生の話がクライマックスに近づいてきた。

「ええー、だからこそ皆さんには挨拶をしっかりしてほしいのです。」

パチパチパチパチ

やっと終わった。

はつきり言っ、ルナの方もかなり疲れていた。しかし、委員長としてのプライドから姿勢を崩す事は出来なかったのだ。

それに比べて、ゴン太はぐったりして欠伸までしているこの違いはどうした事か。

しかしそれはスバルにも言える事だった。欠伸こそしていないが、ぐったりしている。

しかもウォーロックはハンターの中で寝ている。こんな連中が地球を救ったのか、と、お偉いさん達は思うだろう。

しかしそんなスバルも委員長であるルナには頭が上がらない。

それを象徴するのは、次が委員長であるルナの話（一学期の抱負）だというアナウンスと共に姿勢はピシツとし、真つすぐ前を向いた事だ。

スバルは

（ぐったりしている事が委員長に知られたら何を言われるかわからない！疲れているけどしつかりしなきゃ！！）

と思っっているのだ。

まさか地球のヒーローがこんな田舎の委員長に頭があがらないのか！？と思うがそうである。それにそのヒーローと一緒に戦ったゴン太はというと、欠伸をしている。この状況を他の星のヒーローが見たらいったいどう思うだろう。しかしそんなゴン太も、

「以上で始業式を終わります。」

というアナウンスと共にまるで生き返ったかのように元気になるのだった。

だがその後クラスに戻るとルナに説教をされた。スバルは姿勢を正していたが、ゴン太はぐったりして欠伸までしていたのだ。怒らない方がどうかしている。

その後先生が入ってきたおかげでゴン太は解放されたそうだ。

一方スバルとキザマロはゴン太があんな状況なのに、転校生の話をしていた。今日は、転校生が3人来ることになっているそうだ。キザマロが先生達が話しているのを聞いたらしい。もっとも、キザマロが小さすぎてわからなかったのだろうか。

閑話休題。話を戻そう。

「一体だれが来るんでしょうね。」

「本当だね。」

「ジャック君でしょうかね。」

「それはないと思うよ。」

「何故です?。」

「まだ服役中だと思うしジャックは頭が良いからね。」

「なるほど。じゃあツカサ君でしょうか。」

「それは有り得そうだね。ツカサ君って本当に神出鬼没だから。」

「まったく同感ですよ。」

「「あははははは。」」

「だけどツカサ君は良いとして、他の二人はどうなるんだろう。」

「案外知らない人かもしれませんよ。」

「たしかにね。転校生全員が知っている人だったら変な気がするしね。」

ガラガラガラガラー

スバルがちょうど言い終わった所で、先生が入ってきた。立ち上がっていた生徒は自分の席に座り、先生の方を見る。担任は勿論育田だ。まあまだ三学期なのであたりまえだが。

「みんなおはよう。」

育田が言う生徒達は

「おはようございます。」

と返す。そして育田が、

「突然だが今日は転校生が三人来る事になっている。」

当然だが生徒はざわざわし始める。それをルナが静止し先生にしやべらせる。さすがは委員長だ。

「それは・・・。」

[illegible]

└─┘

全員が一斉に聞く。

「入ってからの楽しみ！」

ズドーン

壮絶にずっとこけた。みんな今言ってもらえるとおもったからだ。みんなが席に座るのを確認し再び育田がしゃべりだす。

「それは、

第三話 転校生（前書き）

またひまだったので書きました。わかっている人がほとんどでしょうが、前回から書き方をかえています。

第三話 転校生

「それは、この三人だ！！入ってきていいぞ！！！」

ガラガラガラガラー

三人が入ってくると同時にクラスの全員が騒ぎだす。その理由は一人の少女にあった。

生で見たことの無い者は会えた喜びで、スバルのような会った事のある者はまさかこの人が来るとは、という驚きで騒いでいる。このままでは転校生が喋れないので育田が皆を静かにさせる。

「こら、皆静かにしろー！じゃあ、三人共、自己紹介していいぞ！」

「双葉ツカサです。今までちょっと理由があつて学校を離れてました。これからもよろしく。」

理由というのはもう一つの人格であるヒカルを封じ込める修業である。

ツカサは幼い時に両親にゴミ収集所に捨てられ、それが原因で多重人格になってしまった。

ツカサはおとなしいのだが、ヒカルは攻撃的で激しい性格。

電波変換が可能で変身時の名前はジェミニスパーク。ツカサはWヒカルはBになり、二人で息のあった戦いかたをする。

修業中にスバルと会い、ヒカルを封じ込めるのを手伝ってもらった・・・。

そして問題の二人目の自己紹介が始まる。

「響ミソラです！！マネージャーに勉強も大事だと言われたので学

「ミソラちゃんは僕の隣に！！」

「いや、僕の隣だ！」

「お前はデブだからだめだよ！！俺の隣だ！！」

そして女子は、

「ミカゲ君は私の隣に！！」

「いや、私よ！」

「あんたはブスだから無理よ！！私の隣に！！」

というちっちゃい戦争が始まった。

この間にスバルはツカサを自分の右隣に座らせて話をしていた。

「二人ともすごい人気だね。」

「そうだね。」

その間も戦争は続いていた。このままでは埒が空かないので育田は本人に聞くことにした。

「私はスバル君の隣が良いです。」

「俺はスバルの後ろで。」

[illegible][illegible]

第四話 以外な！??

キンコンカーンコン

「ふううう。終わったう。」

そう言いながら、ミソラが背伸びをする。そして、男子の目がハートになっている。対してスバルには殺気を帯びた目線を送っている。

これは一種のいじめだ。地球のヒーローとアイドルでアイドルが取られるのだ。自分達を救ってくれたヒーローよりもいつも自分達を歌で励ましてくれるアイドルを取るのだ。

自分の命より娯楽を取る人間。

死よりつまらない日々を取る人間。

有り得ない。有り得ないのだ。命の大切さを知らないなんて有り得ないのだ。それゆえにスバルは困っているのだ。こうなったのは、実質ミソラのせいだが、スバルにはもうそういう事を考える事が出来ない。それほどつかれているのだ。

スバルはどんどん沈んでいく。

そんなスバルを見てミソラは一言。

「大丈夫？」

「う、うん。とりあえず、ね。」

「そっか。」

そういう二人のやりとりを見ていた男子が近寄ってくる。そして、

「なんでお前がミソラちゃんと仲が良いんだよ!!」

「そうだそうだ!」

「本当だよ!なんでお前が!!」

「えっ。・・・そりゃあブラザーだし。」

「なんでお前とミソラちゃんがブラザーを結んでんだよ!!お前とミソラちゃんには接点がないだろ!!」

まったく。せわし無いぐみんどもだ（笑）

「そんなこと言われても・・・いつのまにか接点が出来てたんだよ。」

「はあ!!なにがいつのまにかだ!!いつのまにかはいつなんだよ!!おい!!」

「いつのまにかだからいつのまにかなんじゃ・・・。」

「しのこの言わずに教えろ!!」

このやりとりを見ているとルナとスバルの言い合い(?)に見える。

するとミソラが

「どうでもいいでしょ!!そんなこと!!」

と助け船を出してくれた。さすがの男子もミソラに言われたらしょ

んぼりとする。

「なんでミソラちゃんがあいつなんかの味方を・・・・・・・・・・。」
と言いながら帰っていった。

「大丈夫？」

「うん。でも、委員長の時より疲れたよ。」

「あはは！！そんなにルナちゃんって怖いんだ！！」

「まあね。でも本当はやさしいんだよ。」

「へえ〜。そうなんだ。」

「あら、スバル君。言うようになったじゃない。」

「あつ！委員長！」

ルナはちよつと照れていたりする。

「ちよつとミソラちゃんに聞きたい事があつたからね。でもここで話すのもなんだから、とりあえず教室をでましよう。」

「」「」「うん。」「」「」

そして帰る準備をし、教室を今まさに出ようとしたその時！！

「おい。そのツンツン頭ー。」

「「「「へっー!!」「」「」スバル達が驚いた理由は二つ。
一つ目は、いきなり呼び止められたこと。

二つ目は、さっきの台詞を言った人が以外な人だった事。
そして、その人とは・・・??

「「「「ミカゲ君!!!なんで!!!!??」「」「」

「はっ!??」

いきなり、なんで!!!!??と言われても困る。

「いや、だって口調が全然違うしさ。」

「あゝそれね。なぜかというと・・・。。。

第四話 以外な！??（後書き）

はあー。毎回1000程度しかかけない。でももつとあつたほうがいいのかもわからないし。

「遠回しに感想くださいって言ってるんですよ。」

ありがとうスバル君。僕の代わりに言ってくれて。ってなわけで、感想、おまちしてまーす。

第五話 漆黒の・・・（前書き）

少し間が空きましたが投稿します。

第五話 漆黒の・・・

「なぜかというと。緊張すると性格が変わるみたいな感じ？でもぶっちゃけ自分でもわからない。」

「へえ。でも、その服装は・・・自分でわかっているなら、間をとった服装にすればいいのに。ちょうどいい感じにさ。」

ミソラが言う。ちなみに間をとるというのは、性格に上下があるなら、その間を取ればいいという事だ。

「ううん。そうなのかもしれない。でもやっぱり、始業式だし。それに、とりあえず、イメージはいい方がいいじゃん。」

「そんないい加減な・・・いくら最初にイメージよくても結局その性格じゃあ変わらないんじゃない。」

「まあ堅い事言うな、ツンツン頭。」

ズーン

スバルは落ち込んだ。すごく落ち込んだ。さっきはツンツン頭によるダメージを驚いていたおかげでスルーする事ができたが今回はもろにくらってしまった。

相当なダメージだ。地球のヒーローも悪口にはかなわなかった。

「おいおいそんなに落ち込むなよ。ツンツン頭。」

「そりゃ落ち込むでしょ！！それに全然反省して無いじゃん！！ねえ、詫びる気持ちある！？」

「うん。ちよつとはね。」

「ちよつとは駄目だよちよつとは！！」

「まあいいじゃない。」

「そうよスバル君。」

「そうですよスバル君。」

「そうだぜスバル。今度牛井おごつてやるからよ。」

ルナ、ミソラ、キザマロ、ゴン太の順でスバルをなだめる。そして、

「もうゴン太！！あんたの頭の中には牛井しかないの！！？」

「牛井だけじゃない。豚井もあるぜ！！」

変に盛り上がられても困る。

「同じようなもんじゃない！！」

「そんな。牛井と豚」

「問答無用！！黙ってなさい！！」

「「「はははははは。」「」「」

ルナとゴン太のショートコント（！？）が終わった所を見計らってスバルがミカゲに聞く。

「そういえばミカゲ君。僕を呼び止めた理由って。」

「あっそうだったな。お前に学校を案内してもらおうと思ってな。」

「あら、それなら私達も一緒に」

ルナが言い終わる前にミカゲが、

「ああゝスバルだけでいいぞ。男同士の方がなにかと話やすいしな。」

「なぜかしら？」

この時のルナは微妙にオーラを放っていた気がする。

「うっ。速答かよ。それは異性より同性の方がふつつ話しやすいからだ。」

「全然。全く。問題ないわ。」

またしても速答。しかし、ルナは仮にも委員長だ。話やすさという意味では彼女には男子女子の壁はない。

しかしミカゲも負けていない。すぐに言い返す。

「お前が良くても俺がよくないんだよ！お前はクラスの委員長かもしれないが俺はなんでもないんでね！よし、決まり！決定！よろし

く頼むぞスバル。」

「ははっ。うんわかったよ。」

「なっ。後で見てなさいよ！ーミカゲ君。」

ゴゴゴゴゴ

「うっ……。い、行こうぜ。スバル。」

「う……。うん」

タタタタタ

「い、委員長怖え。」

「そうですね。ゴン太君。」

「二人共！！いくわよ……。」

ゴゴゴゴゴ

「は、はい。」

タタタタタ

「……。あゝ私は……。どうしたら……。はあゝ。」

ルナはともかくキザマロやゴン太にさえも自分の事を気付かれなかったのでミソラは少しの間立ちつくことしかできなくて、周りの人にサインをひたすら書いていたという。

第五話 漆黒の・・・（後書き）

次回は、ミカゲの秘密について明かそうかと。あっミカゲはオリキヤラですよ（笑）

第六話 追究（前書き）

ずいぶんまがきました。すみませんでした。

第六話 追究

「はあゝ。」

ルナからある程度離れた所でスバルとミカゲはため息をつく。ちなみに今は、エレベーターの中だ。今から屋上に行く。とりあえずルナから離れておこうという理由でだ。彼女の殺気と、漆黒のオーラは凄まじかった。そうこうしている間に屋上についた。他の人は二、三人程いる。そこからなるべく離れた所に行き、芝生に寝っ転がる。芝生は気持ち良い。まるで布団に入っているようだ。ミカゲは思わず欠伸をしてしまう。

「ふあゝあ。気持ち良いな。」

ついでをいうとミカゲは伸びもしている。このままだと、まだ二時だというのに寝てしまう。そう感じたスバルはとりあえず体を起こす。するとミカゲも体を起こし、スバルに話かける。

「なあスバル、あいつっていつもあんな感じなのか？」

「えっ、う、うん。まあね。本当はやさしいんだけどね……。そういえばミカゲ君。」

「なんだ？」

「ミカゲ君ってなんでこんな田舎の学校に転校してきたの？」

「おいおい自分の町を田舎って言うのかよ。それに仮にも地球のヒーローが住んでいる町だぜ。」

『おい、なぜそれを知ってるんだ。』

「確かに。なんで僕らがロックマンだと……。」

「ギクツツッ！ー！（やつべー。つい口が滑っちゃまったー。どうはぐらかそうかな……。あっ！そうだ！）」

「どうかした？」

「あのな。俺は、お前達がロックマンとは一言も言ってるねえぞ。地球のヒーローがこの町に居るって言ったんだ。そういうの早とちりっていうんですよ。スバル君。」

「えっ……。 （すごい軽蔑の眼差だな） 確かに。」

『それじゃあ何故この町に居ると？』

「ギクギクツツ！ー！（まためんどくせえ事を！ーもうここは折れるしか……。 いやっ！大丈夫だ。 よしっ！）」

『なにをこちゃこちゃ言ってるんだ？』

「はあ。何故わかったって、前ここに流れ星的なのがおちてくるのが、みえたからだよ。」

「ああ。父さんとウォーロックか……。」

『でも、何故それだけで確信をもてたんだ。』

「それはだなく。うん・・・」

『さつさとはけ！！何故わかったんだ！！』

まるで取り調べをする刑事だ、スバルはこう思った。

「（確かにウォーロックは刑事ドラマが好きだけど、そう簡単に癖にはならないよね。まさか、この状況を楽しんでいるのかな。ウォーロックってSだったっけ。）」

Sとはいじめるのが好きな人の事だ。ついでに言うとな逆にいじめられのが好きなのはMという。

「（はあ。とりあえず、嘘のない程度に簡単にまとめるか・・・。）」

『どうした！！さつさとはけ！！』

「はいはいわかりました。話します。俺は、WAXAの職員なんです。」

なるほど。

スバルとウォーロックはそう思った。WAXAの職員なら、自分がロックマンだとばれていてもしょうがない。メテオGの事件の時はWAXAからメテオGにアクセスした。スバルが電波変換する所を見た者も少なくないだろう。だからWAXAの中ではスバルがロックマンという事は、常識かもしれない。そう思った。そして、ミカゲが続ける。

「俺は学校なんか行かなくても頭が良いから大丈夫だと言ったんだが、

頭が良いから学校に行かなくても良いというのはいけない。学校は心を育てる場所なんだ。

って言われてな、仕方なく学校に来てるんだ。まあ、ここからの景色はきれいだし、それに、芝生も気持ちいいし、なにより風が気持ちいい。」

全部屋上の事じゃないか。

そう思ったがスルーする。そしてスバルが言う

「へえ。そうなんだ。でも12歳で良くWAXAに入れたね。」

「まあ、色々あつてな。」

「その色々って・・・」

ドゴーン！！

物凄い轟音、それに地面がゆれた。

「な、なんだ！」

『ウィルスみたいだな。ちょうど良い、体が鈍っていたんだ。』

そう言つて、ウォーロックはビーストスイングの素振りをはじめ。

「はあ。めんどくさいなあ。でも、誰かが倒さないとなあ。」

「がんばれ、地球のヒーロー。負けんなよ。」

「うん、ウィルスごときに負けないよ。」

『うし、行くぞ!』

「うん! トランスコード!!」

スルは電波変換をし、ウィルスがいる所にむかった。

第六話 追究（後書き）

あまりミカゲの説明をしていませんね。まあ、これから物語をす
めていく上で少しずつ明らかにしていきます。

第七話 ウィルス（前書き）

この小説内では初の戦闘ですね。うまくかけているかは分かりませんが、どうぞ！！

第七話 ウイルス

「えっ!!」

「なんだってんだ!!」

「メットーメットーメットーメットーメットーメットー。」

「『いつたい何体いるんだ!!』」

スバルとウォーロックの前にはメットリオの大群が広がっていた。雑魚として有名なメットリオだがこう数が多いとメットリオが強く感じてしまい、威圧感さえもある。

そして奥の方では、ハーブノートがメットリオ相手に必死の応戦をしていた。

また、このただでさえ多いメットリオは未だに増え続けている。このままいくと、この屋上から溢れだしてしまうだろう。

そうなるとコダマタウンの機能が停止してしまう。

いくらメットリオといえどもインターネットウイルスはインターネットウイルス。町のシステムに様々な被害をだすだろう。

「早く倒さないとコダマタウンが!!」

そうしてスバルとウォーロックも戦い始める。ちなみにウォーロックはハンターから出て、ビーストシングで戦っている。その様子を見て、スバルも戦い始める。

「バトルカード! マッドバルカン!!」

ズダダダダダダダダ

スバルは戦闘のプロだ。伊達に地球を三回救ったわけではない。メットリオのHPの低さを考慮して、連射力の高いマッドバルカンを選択。それにマッドバルカンは、多少の誘爆性能も備えているので、広範囲を攻撃できる。つまりマッドバルカンはこの状況に一番適応したバトルカードだという事だ。その判断を一瞬の間にするのだからすごい。

しかし、ウィルスはどんどん増え続けている。

『このままだと埒があかないぜ!!』

「そうだね・・・。」

そう判断したスバルは、マッドバルカンよりも広い範囲を一気に攻撃でき、なおかつ攻撃力の高いギガクラスカード、ブレイクカウントボムを使う。

3・2・1ドガーーーーーー

ブレイクカウントボムが爆発し、大量のウィルスの60%位がデリートされる。そしてハープノートがいるところまで行く事ができた。

「大丈夫？ミソラちゃん。」

「うん、とりあえずはね。でも、話している場合じゃないみたいだよ。」

『メットーメットーメットーメットー。』

さっきブレイクカウントボムで大半をデリートしたはずなのにまたメットリオの数が増えている。

『ったく！！いつになったら、消えるんだ！！こいつらは！！』

「ここまで増え続けるのは変だよ！！」

「確かに・・・。」

ウォーロックとミソラとスバルは、ウィルスを手リートしながら話す。確かにここまで増え続けるのは変だ。少し位なら、自然発生したと考えられるが、ここまで大量に増えると自然発生したかも知危うくなってくる。ウィルスが自然発生するか、それとも何者かによって作り出されるかには、天と地程の差がある。作り出されたウィルスの場合、ディーラーのような犯罪組織が関わっている可能性もある。電波人間を送り込まなくてもウィルスを暴れさせるだけで、スバル等をおびき出せると考える者もいるかもしれないのだ。

「どこかにこのウィルスの発生源があるはずだ！！」

スバルはメットリオを倒しながらも、このウィルスの発生源を探す。スバルの声を聞いたハーブノートも同じようにしてウィルスの発生源を探す。ウォーロックはスバルのハンターに入り、ウィルスの発生源を探す事に集中する。しかし分かる事はリアルウェーブの桜の方からウィルスが増えている事だ。それ以上の事はウィルスが邪魔して分からない。そして発生するウィルスが次第にメットリオからクロケットになってきた。クロケットは突進してくる鳥形のウィルスだ。突進した後は消える。いわば特攻隊だ。本当に死ぬかは分か

らないが特攻隊だ。その死を知らない特攻隊兼鳥達は、スバルとミソラを攻撃しはじめる。近づいてくる特攻隊兼鳥達をスバルはウィンディアタックで吹き飛ばす。そしてスバルは後悔する。最初からこうしてけば良かったと。スバルとミソラの視線の先にはいまなおウィルスを出し続ける黒い物があった。

第七話 ウィルス（後書き）

どうでしたか？感想お待ちしています。

第八話 黒い物（前書き）

また間が空いてしまった。すみません。

第八話 黒い物

「あれだね。」

「うん。この大量のウィルスを出しているのはあれだ!」

スバル達の視線の先には、今尚ウィルスを出し続ける黒い物がある。それは空間が破壊されて、そこから出てきたように存在している。

つまり、実体が無いような外見だ。

そして、ウィルスが無造作に生み出しているように見える。

しかし、無から有を作り出す事はできない。それが、この世界の法則だ。

あの黒い物はおそらくこの事件を起こした犯人の所につながっているのだろう。

しかし、そこにアクセスしようとしても、ウィルスが邪魔をして行く事ができな。なので今はあの黒い物を破壊する事を考えるしかない。

しかし、ウィルスが多いため、そう簡単には行かないだろう。それに、特攻隊兼鳥形のウィルス達はいまも増え続けている。このままでは本当にこの屋上からあふれだしてしまうだろう。

「とにかくこのウィルスをどうにかしないと黒い物を破壊できないよ!」

「でもだからと言って、またさっきみたいにウィンディアタックを使っても黒い物に一気に近付ける訳でもないし。」

「大丈夫!! 私もいるから!! 二人でやればなんとかなるって!!」

「うん、そうだね。バトルカード！……？」

『どうした？スバル。』

「……まさかね。でも……！！！」

『だからどうしたんだよ！！早くしねえと……。』

ウォーロックが言いおわる前にスバルはバトルカードを読み込む。

「いくぞ！！バトルカード！トップウ！！」

スバルがバトルカードを読み込むと箱が出てきて、猛烈な風を起こす。

そして特攻隊兼鳥形のウィルス達はウィンディアアタックののように吹っ飛び、消える。

黒い物から出てくるクロケットの数とトップウで吹き飛ばす数では、吹き飛ばす数の方が多く、黒い物にどんどん近付いていく。

トップウは置物系のバトルカード。ウィンディアアタックのように、バトルカードを使った者自身自らが風を起こすのではなく、無造作に風を起こし続けるのでかなり効率が良い。しかし、思った場所にピンポイントで風を起こす事はできないのがトップウだ。しかし、今はただ風を大量に送るだけで良いのでウィンディアアタックよりもトップウの方がこの状況に適しているだろう。

トップウが起こす風は特攻隊兼鳥形のウィルスを吹き飛ばし続けるやがて黒い物の目の前まで来る事ができた。スバルはトップウを自分の前に置き、黒い物を破壊する準備をする。

『スバル。聞きたい事があるんだが。』

「なに？」

『おまえはなんで、この見たことの無いバトルカードがこういう効果があるとわかったんだ？』

「あれ、ウォーロックも知っているはずだけど？」

『はあ？・・・・・・・・！！そうか！！』

「わかったみたいだね。」

『ああ、わかったぜ。後でゆっくり話そう。』

「あの〜。まったく話が見えないんですけど。」

スバルとウォーロックが話している事がわからないミソラが聞く。

「あつ！そうか！ミソラちゃんはわからないんだよね。」

『それもそうだな。スバル、さっさと片付けて教えてやるっぜ！』

「うん。いくぞ！バトルカード・・・・・・・・。」

『どうした！早くしろ！』

「でも、まったく見たことの無いバトルカードが・・・・。」

『めんどくせえから使っちゃえ！』

「はいはい。（本当ウオーロックってがさつだね。）」

「なんか言ったか！！？」

「……。バトルカード！！シューティングスターコメント！！」

「おい！無視すんな！！？」

ズガガガバーン！！！！

◻ ◻ ◻ ◻ • • • • • • • • • • • • ○
└ └ └ └

先程のウォロックの言葉の文末が疑問系だったのはその見たことの無いバトルカードの威力が凄まじかっただからだ。

最初にメットリオくらいの大きさの雪玉があらわれると、空気中にあるウィルス達の残留電波を飲み込みながら黒い物にむかつて進んでいき、最終的には屋上全体がすっぽり入るくらいに大きくなり、黒い物を粉碎した。

その破壊力に全員啞然としている。

それもそのはず。

こんな威力の強いバトルカードは見たことがなかったからだ。

その後、電波変換を解き、ロックマンはスバルとウォーロック。ハーブノートはミソラとハーブに戻った。

「にしても、あのバトルカードの破壊力は凄まじかったね。」

「うん。でもあんなバトルカード見たこともないよ。いつ、どこで

手に入れたんだろう。」

『ああ。俺にも覚えがないぜ。それに、二百年前にもあんなバトルチップは無かったしな。どこで手に入れたんだ？』

「『うーん・・・・・・・・。。』」

二人が考え込んでいると、訳の分からないミソラとハーブが二人（？）に話し掛ける。

「『ねえスバル君。まったく話が見えないんだけど・・・・・・・・。二百年前って？バトルチップって？』」

「（すごく見事にはもったな。）じゃあ一つづつ教えるね・・・・・・・・。」

そう言うときスバルはミソラとハーブの質問に答えはじめた。

第八話 黒い物（後書き）

結構付箋をはっているつもりなんですよね。これからもしゃんじやんはってきますよ。

第九話 衝撃のカミングアウト（前書き）

またまた間が空いてしまった。安定した更新を心がけないといくならないに^{（1）}。

第九話 衝撃のカミングアウト

「まず、二百年前だけだね、」

スバルはミソラとハーブの質問に答え始める。質問の内容は、二百年前とバトルチップについてだ。

「覚えているだろうけど、ミソラちゃんがクロックマンに連れ去られて僕が行った世界だよ。そこにはまだ、ウェーブロードが無くて、電腦世界しか無かったんだ。でも電腦世界が大きいから、ウェーブロードが無いからってメールや電話とかの通信が不便というわけじゃないんだよ。」

そして二百年前には今で言うウィザードのネットナビがいて、ネットナビは今で言うハンターV.GのPETの中にいるんだ。

ネットナビはオペレーター、つまり持ち主の代わりに電腦世界に行く事ができるんだよ。

ちなみに、ネットナビを電腦世界に送り込む事をプラグインというよ。」

「ふーん。つまり要約すると、二百年前には今で言うウィザードのネットナビがいて、ネットナビは今で言うハンターV.GのPETの中にいる。ネットナビは電腦世界に行く事ができて、その電腦世界はすごく大きいと。こういう事？」

要約しすぎだ。スバルはそう思ったが全力でスルーした。

「まあそんな感じだね。」

「じゃあ私とスバル君がこつちの世界に来る直前にいた所も電腦世界なの？」

「そうだよ。」

「へえ。そうなんだ。てっきり現実世界だと思ってたよ。電波変換が維持されていたし、隣にも電波体みたいなのがいたからね。」

「その電波体みたいなのがネットナビなんだよ。青い方はロックマンって言って、ピンクの方はロールって言っんだ。」

「一緒にいた青いのもネットナビなの？」

「うん、そうだよ。そしてオペレーターの名前は光熱斗っていうんだよ。ほら、最後未来に帰る直前に声がしたでしょ。」

「へえ。ずっと電波変換したどちらかの声だと思ってたけど、現実世界にいるオペレーターの声だったんだ。」

ミソラが言っている意味を説明すると、電波変換は、普通人間と電波体が融合する事でできる。人間の方が操られているという場合やムー大陸で見たようにエランドと電波体が電波変換している例外を除けば、ほとんどの場合一つの電波体の中に意志を持っているのは二体。そのどちらかがしゃべっていると思ったところいう事だ。スバルはミソラの言った事が理解できた所で再び話します。

「まあ、初めて見たからそう思ってもしょうがないよ。そろそろバトルチップの説明に入っていいいかな？」

二百年前の説明のはずが話が完全にずれてしまっていた気がしたスバルはバトルチップの説明をすることにした。ミソラもまだまだ質

問いたい所だったがある事を思い出したのでOKを出す。

「うん、いいよ!」

「バトルチップっていうのは、今で言うバトルカードみたいなものだよ。二百年前の当時にすでにウィルスはいたんだ。だからバトルチップを作った。今の時代と同じだね。ウィルスによる被害がサテラポリスでも対応できなくなった。だから民間でもウィルスに對抗できるようにバトルカードを作る。二百年前の当時と同じ事をしていたという訳だよ。」

「それでなんでその二百年前に合ったバトルチップをスバル君が持つてるの?」

「ここからは僕の推測だけど、僕、二百年前の世界から今の世界に帰る時に熱斗君に僕の意志データと戦闘データを渡したんだ。そのデータに熱斗君が使ったバトルチップのデータが入っていつて、そのデータが本体である僕に入ってきたと思うんだ。いくらデータといえども自分の意志データと自分は分身みたいな物だからね。」

「なるほど。そしてさっきの戦闘でスバル君が入ってきたデータに気付き、使ったと。」

「そういう事。でもまだ不可解な事が一つ。」

「まあ続きはスバル君の家で!」

「『へえっ!!?』」

「スバル君お母さんから聞いてないの?私、今日からスバル君の家

第九話 衝撃のカミングアウト（後書き）

最後は無理矢理おわらせた感全開でしたね。

第十話 凍結（フリーズ）（笑）（前書き）

一週間ぶりの更新。 まあすこしづつ縮めていくのでこれからもよろしく願います。

第十話 凍結（フリーズ）（笑）

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

二人と二匹（？）の沈黙が続く。もう二分間も一言もしやべらない。その理由は二つ。スバルとウォーロックミソラとハープでそれぞれ違う。

まずはスバルとウォーロックだ。それは二分間前にさかのぼる・・・。

（回想）

「『ええええ！！（長いので略）』」

意表を突かれるミソラのスバルの家居候宣言。その後スバルとウォーロックは凍結^{フリーズ}しそれぞれ口に出さずにこのような事を考えていた。

「ミソラちゃんが僕の家にな？」

「あいつがスバルの家にすむだと！？？」

「『嘘だ・・・。嘘に違いない。』」

「でも嘘にしてはたちが悪すぎる。」

『なぜそんな嘘をつくんだ。』

「『謎だ……。ミステリーだ……。』」

あんたらの言動の方がよっぽどミステリーだ。なんで言葉にも出していないのに同じ事考えられるんだよ。

「あつ！まさか……。！」

おつ！スバル君がなにかひらめいたようです。

「母さんの手料理が食べたいのかも……。」

いやいやいやちがうでしょ！！手料理食べたいだけなら居候しないから！！

『んん！！まさかあれじゃないか……。』

次はウォーロックがなにかひらめいたようです。期待はできませんが聞いてみましょう。

『あのメテオGを止めた大吾に会いたいのか！』

はい。スルーしますね。

えっ！さっきから口出ししているあんたは誰だっ？それはね……。なにを隠そう！作者だ！！この小説の神だ！！……………

「きゃあああ！！！！すごい風！！」

ガツゴツギヤツガギヤツ！！！！

「へえ？何の音？」

ミソラはそう言いながら辺りを見渡す。すると風にあおられたのかスバルは固まりながら側転していた。（何故そんな音を出すのかわからないのだが。）

しかもスバルはまだ放心状態のままなのでこのままいくこの屋上から落ちてしまう。

しかしミソラは動かなかった。

スバルはすでに凍結フリーズの状態からすでに抜け出していて、それによって風の影響もあつて側転していると思つたからだ。それに、落ちそうになったら自分でなんとか止めようとするだろうと思つたからだ。目の前に危険が迫っているのに自衛しないはずがないのだからミソラの考えは半分当たりで半分はずれだ。スバルはまだ凍結フリーズしていて、風にあおられて側転している。つまり、このままいくと落ちてしまう。

もう一度言つ。

落ちてしまうのだ。

そんな大変な時なのにミソラはこう思つた。

「スバル君。その側転の華麗さじゃ体操選手になれるよ・・・。」

『ちよつ！ミソラ！なに言つてるの！？』

そんなこと言っている暇があつたら早くスバルを助けた方がいいんじゃないの？とハーブは続けたがミソラは全く聞いていなかった。

そしてミソラが止めないのです。スバルはどんどん屋上のフェンスに近づいていく。だがギリギリの所で風が止まり、スバルは落ちずにすんだ。

しかしスバルはすごい。なぜなら体が凍結しているのにもかかわらずずっと側転し続けていたのだから。

ミソラとハープはとりあえずスバルが落ちずにすんだので一息つき、スバルがいた方をむく。しかしスバルはいなかった。たった一瞬で消えてしまった所からして、電波変換したと考えられる。

「スバル君。どこに行っちゃったんだろうね。」

『さあ。とりあえず電波変換の方がいいんじゃない？』

「そうだね。トランスコード!!」

するとミソラはまぶしい光に包まれる。光が晴れるとミソラは消えていた。電波変換をすると可視光線から外れるので見えなくなるからだ。

「うゝん。スバル君、いないな。ハープ？スバル君の周波数わからない？」

『うゝん。すでに電波変換を解除しちゃったみたいね……。残留電波をたどっていけばいけると思うけど……。あっち……。かな……。？』

「んん？あっちの方向ってスバル君の家じゃない？」

ハープが示した方向にはスバルの家がある。そこでミソラはスバルの家に行くことにした。

ミソラがスバルの行方を探している時スバルはあかねに問い詰めていた。

「なんで言ってくれなかったのさ！！？ミソラちゃんが僕の家に来るって！！！」

「だって私から言うよりミソラちゃんが言った方がびっくりするじゃない」

「そんな理由で……。僕は部屋を片付けて無いんだよ！！先に言ってくれば……。」

「良いじゃない別に。ミソラちゃんがあなたの部屋に入るとは限らないじゃない。」

あかねはスバルを完全にかかっている。しかしスバルはそれに気付いていない。人は熱くなると視野が狭くなると言うがまさにこのことだ。

その後ミソラが帰ってくるまでスバルはあかねにかかわれ続けたという。

第十一話 精神的ダメージ（前書き）

気が付いたら、いつのまにか二週間たってる、そして短いのを投稿する。（笑）
なんかすみません。

第十一話 精神的ダメージ

スバルは今自分の部屋にいる。

「夕食ができるまでは部屋にいて良いわよ。」

とあかねに言われたからだ。

スバルも疲れていたものでうれしかった。疲れたと言うのも今日はさんざんな一日だった。まずミソラとミカゲが転校してきた事。これはさほどのダメージでは無かったが、その後のミソラとミカゲの近くに座りたいというんでも発言によってクラスすべての生徒から殺気を帯びた視線を浴びたことのダメージがある。その後のウィルスとの戦い。これも特に疲れた訳では無い。確かに体力的には疲れたが、新たな発見があったことが大きかった。新たな発見というのは、二百年前のチップを今の時代でも使う事ができるということだ。それよりミソラが自分の家に居候するという衝撃のカミングアウトによる精神的なダメージの方が大きかった。その精神的なダメージ二つの合計ダメージとなると、そのダメージは破壊的な数値を示すはずだ。しかしそれに耐えるスバルもたいしたものだ。伊達に地球を三回救っていない。普通の人だったらすでにダウンしているだろう。

「・・・今日はとんでもない一日だったね・・・。」

『・・・そうだな・・・。』

「これも・・・。」

『全部あいつのせいだな・・・。』

「そうだね。おかげで精神的にすごくまいっちゃった。初めてだよ、こんな事。」

『そうでもねえだろ。俺と出会う前のお前は太吾が消えたショックで引きこもりだったんだからよ。』

ウォーロックがそう言うつとスバルは速答した。

「それとこれは違うよ。あの時はただ絆を持つのが怖かったんだ。」
しかしウォーロックも負けじと返す。

『それが精神的にまいってるつつう事だろ?。』

絆を持つのが怖いのは、太吾というかけがえの無い家族をなくして、心に大きなダメージを受けてしまい、すべてをマイナスな方向に考えるようになってしまったから。つまり、その時のスバルは精神的にまいっている状況であるという事だ。

「・・・。そうなのかな? (ウォーロックのSがまた発動している気がする・・・)」

『なんかいったか?』

「なんでもないよ。にしてもなんで僕の家なんだろうね。委員長にでもお願いして、あの高級マンションに住めばよかったのに。」

《こね》というやつだ。一人入れる位の部屋の余裕はあるだろう。仮にも高級マンションだ。それに入居するような金持ちはこの町にそうたくさんいない。開いてる部屋も一部屋だけじゃないかもしれ

ない。それに金持ちの娘の友達の上に国民的アイドルだ。入れない訳が無い。それにも関わらずミソラはスバルの家を選んだ。

「何か裏があるのでは？……。」

とスバルが言う。するとウォーロックが、

『そんなのどうでもいいだろ？考えすぎだぜ？スバル。』

と言った。それもそうだ。ミソラがどこに住むかはミソラの自由、高級マンションはミソラには合わなかったのかもしれない。それなら、スバルの家に来たのも説明がつく。彼女ももとはごく普通の家に住んでいた。ルナのようにもともと高級マンションに住んでいたならともかく、もともとは普通の家にいたのならそれを受け入れるのも必要だろう。

「はあ〜。」

それを考えても、スバルにはまだ何かあるようだ。

『どうしたスバル。さっさと立ち直れ。俺だってハーブというのはいやなんだからよ。』

「うん。でも、クラスみんなが……特に委員長がなんて言うか……。はあ〜。またあの視線を浴びるのか……。」

「スバル君〜、ロック君〜。夕飯できたよ〜。」

スバルが沈んでいると、ミソラから夕飯の呼び出しがあった。

「はい。今行くよ〜。」

『……んじゃ、行きますか？』

第十二話 食事

スバル達夕食を食べている。無論、ミソラも一緒だ。大吾はまだ勤め先であるWAXAから帰っていない。帰るのを待つのが普通だろうが、先程あかねに大吾から電話があり、「遅くなるので先に食べていて良い。」と言われた。そのため三人で食べているのだ。

今日の夕食はミソラの歓迎会も兼ねているので、ハンバーグやらスパゲッティやらステーキやらがわんさかんさ大量にある。それをミソラは、目に止まらないスピードで食べていく。

スバルは前にもロツポンドーヒルズの店の大きいパヘエをたいらげるミソラを見たが、まさかパヘエ以外の物もこんなに食べるとは全く考えもしなかった。女の子だからパヘエ等の、いわゆるデザート類は大量に食べられても逆に女の子らしい（・・・）ので違和感はないが、まさかそれ以外のハンバーグやらスパゲッティやらステーキやらのメインディッシュまで食べるとは思わなかった。

「ねえミソラちゃん。ミソラちゃんの胃袋ってブラックホールなの？」

「あらスバル。女の子にそんな事いっちゃだめなのよ？」

「だって食べ物をまるでブラックホールのように吸い込んで行くんだもん。」

「ぶっ！スバル君の意地悪！」

スバルが言った事にミソラが怒るように言った。無論、演技だが・・・。

『さあな。おれには関係ねえし。』

「はあゝ。まあいつか……。」

そう言いながらスバルは自分の部屋にいった。

一方ミソラは……

「はあゝ！満腹満腹！」

『本当にあなたってよく食べるわよね。』

「えへへへへ！だってスバル君のお母さんのご飯、すごくおいしいんだもん！」

「ありがとう。ミソラ。」

「へっ！？」

ミソラとハーブが話していると皿洗いを終えたあかねがミソラ達の話に混ざる。

「後、スバル君のお母さん。じゃなくて、お母さんでいいわよ。あなたも星河家の一員なんだから。後、大吾さんも同じように、お父さんでいいわよ。あなたが来るってわかった時に大吾さんと決めたから。」

「あの、ありがとうございます。スバ・・じゃなくて、お・お母さん・・。いろいろ考えてくれて・・。」

「いいのよ。（スバルの事、よろしくね!）」

あかねが言う。

「えっ!」

突然のあかねの言葉にミソラは赤くなる。

「あの子、鈍感の極みだから、言わないとわからないわよ。」

「はい。・・でも、もうちょっと後にしようと思います。スバル君の事、もっと知りたいので。」

「ふふっ!頑張ってね!」

「はい!」

一方スバルは・・・

「はあゝ。なんで初日からいきなり宿題がでるんだらう。始業式の日位宿題無くてもいいじゃん。」

宿題と格闘していた。

ウォーロックはというと、ハンターからでて、ビーストスイングの

素振りをしている。スバルの耳にはその素振りの音が届いているが、宿題に集中しているため、気になりはしないだろう。実際、すごく大きな音が出ているのだが。

「よし！後一教科！うおおおお！！」

「・・・あら、始まったわね。」

「何がですか？」

「ロック君の素振りとスバルの宿題との格闘よ！」

あの音は一階ねあかね達にも聞こえているらしい。

「へえ〜。って感心してる場合じゃない！私も宿題あるんだった！」

そう言っミソラはスバルの部屋にいったのだった。

ミソラは部屋が足りないという理由でスバルの部屋に一緒にいるという事になったのだが、ミソラにとってもそれは好都合だった。一緒にいればいろいろな事を知る事ができるからだ。

「ふふふ。青春ねえ〜。あっ！お風呂沸かさなきゃ。ん？までよ。さては・・・。んふふ。面白い事になるといいわね〜。ちよっとその可能性は薄いけど・・・。さて、どうなる事やら。」

あかねはスバルとミソラにとってすごい悪影響をもたらす事を思いついたようだ。どうなることやら。

第十二話 食事（後書き）

あかねですが、もちろん風呂と一緒に入るなんてことは自粛してもらいます。皆さんでよそうしてみてください

第十三話 戦いの予兆

今、スバルとミソラは宿題と格闘している。と、言っても、実際に宿題をしているのはミソラで、スバルは教えているだけだ。

そしてその宿題も後一教科、算数だけとなった。そして最後の問題。

「え」と、この問題はここをこうやって、そう、そして時速をもとめたら、これと掛け算して・・・終わり！」

「終わった！ありがとうスバル君！」

「いいんだよ。今日の宿題は多かったし、僕も教える事で二回やった事になったしね。」

そして、宿題の終わったたちょうど良いタイミングであかねからお知らせがあった。

「スバル、ミソラ。お風呂沸いたわよ！」

「はい！」

「スバル君。先入っていいよ。」

「ありがとう。じゃあ行ってくるね。」

「うん。」

そしてスバルは一階に降りていった。

「でもスバル君の部屋って本当に宇宙の本ばかりだね。」

『そうね。本棚にからはみ出て机においてあるんだものね。』

「なんでこんなに集める気になったんだろう。」

『さあ？でも、人ってその気になれば何でもできるじゃない。』

「なにそれ……？」

『女の勘？……かな。』

「もっと意味わからないよ。」

『そう？』

「そうだよ。」

「『あははははは！』」

その頃スバルは風呂の準備をしていた。

『なあスバル。』

「何？」

スバルは手を動かしながら答える。

『お前はあの女の事、どう思ってるんだ？』

「うゝん。まあブラザーとして、大切な存在かな？。」

『そうか……。』

「ふゝん、そうなんだ。」

「『うわっ！／＼うおっ！』』

スバルとウォーロックが話しているところにあかねがいきなり割り込んできた。

「まつ、ちゃんと守ることね。その大切な人を……。さっ、早くお風呂に入りなさい。」

「うん……。何言ってるだろう。母さん。」

スバルは疑問を持ちながらも風呂に入った。

湯槽に浸かっている時にスバルはウォーロックに聞いた。

「にしてもさっきの母さんの言葉、なんだったんだろうね。」

『ま、そのまんまとれば、ブラザーとして大切なミソラを守ってや

れって事だろうな。』

「めんどくさいし、じゃあそつゆう事で！」

『だな。そろそろあがるか！』

「うん！」

あかねはそのやりとりを風呂の外で聞いていた。

「うふふ。やっぱりわからないか……。でも、ロック君がいなければこの答えが出なかったかも。これは予想以上の鈍感ね。」

「ただいま。」

「あつ！大吾さん！」

「あかね。スバルいるか？」

「今お風呂。でももうすぐあがるわよ。」

「そうか。」

そう言ってすぐにスバルとウォーロックがあがってきた。

『ふう。良い湯だったぜ。』

「ウォーロック。それいつも言ってるよね。」

『るせー。どうだっていいだろ。本当に良い湯なんだからよ。』

だからと言って毎日言つのはどうかと思つのだが。

「ははは。あつ、父さん。おかえり。」

『ん？おつ、大吾。』

「あゝ。ただいま。さつそくなんだがスバル。ちょっと話がある。散歩に行かないか？」

「うん。良いよ。（話つてなんだろう。）あつ、そうだ。母さん、ミソラちゃんにお風呂開いたつて伝えておいて。」

「うん。わかったわ。いつてらっしゃい。」

「『行つてきます。』」「」

家を出てから少し歩いた所で大吾が口を開いた。

「・・・スバル。今日、妙な事が起こらなかったか？」

「起こったけど・・・。」

スバルが続けようとした所を大吾が続けた。

「それって、ウィルスを出し続ける変な黒い物か？」

『ああ、そうだ。でも、俺達とミソラで片付けた。』

「そうか。実はなスバル、ウォーロック。その現象が今日一日の間に世界各国で確認されてるんだ。まったく同じ物が。」

スバルが見た一つだけが、確認されていたのならともかく、世界各国で確認されている事を考慮すると、大きな組織、それも世界中にまで広がっている組織が考えられる。

「『なんだって!』」

「それって・・・。」

「ああ、近い内に再び戦いが始まるかもしれない事を意味する・・・スバル。その時は、「うん、戦うよ。僕にできる事ならなんでもする。」

「ありがとう。じゃあさっそくなんだがスバル。明日WAXAに来てくれないか。ミソラや、ゴン太君、ツカサ君を誘って。」

「うん、わかった。皆に連絡しておくよ。」

「ありがとう。それとな、スバル。」

「なに？」

「ミソラとは、どこまでいったんだ？」

「えっ！！べ、別に……。」

さすがのスバルもこれだけ単刀直入に言われればわかる。

「そうか。まあ頑張れよ。」

大吾はそう言つてスバルの肩を叩くと家に向かつて歩きはじめた。

「うん……。つてまつてよ！父さん！！」

――某所――

辺りはもう真つ暗になった頃。外に二人の人がいた。いや、実際に《外》にいるのは一人だけ。もう一人の方は、外にいる方の手の平から出ている《なにか》に映っている。

「さあゝて、そろそろ動くかな♪」

「そろそろつて……。いつから見てたの？」

「あいつらが生まれた時から……。」

「あなた、ある意味変体ね」

「ある意味じゃなくつてな、普通に変体だろ。自分て言うのもなんだかな。……スバル。お前ならこの試練を乗り越える事ができるだろう。期待してるよ。」

「ふふっ、そうね。あの子達ならできる。きつとね。」

「問題はちゃんと力を使いこなすことができるかだ。でも、まずは力を発動する事ができるか、そしてそれに気付けるかどうか。できなければ、俺が直接介入する事もありえる。それだけはさけたいが・・・。」

「まあ堅くならずに！」

「そうだな。本当に期待してるぜ、・・・。」

男が最後に言った言葉はとても小さくて近くにいたもう一人の方もまったく聞こえなかった。

第十三話 戦いの予兆（後書き）

また付箋！！さあこいつはなにものだ！！！！わかったら神だ！！！！
まっ、絶対わからないだろうけどね、まあ言っちゃうと、流星とは
まったく関係のない、魔法の分野の事です。しかも、その・・・。
おっと！！これ以上はネタバレになるので言えません。
では！感想待ってます！！

第十四話 長い長い一日（前書き）

二週間も待たせてしまつてすみません。テストがあつたので・・・

第十四話 長い長い一日

「母さん。今何て言った・・・？」

スバルは散歩から帰ってきて、あかねとある事を話している。スバルにとって悪いことは確かだ。

「だから。布団用意しておくのを忘れたから、一緒に・・・。ね！」

「駄目に決まってるでしょ！！まだそんな関係じゃないんだよ！！」

「まだ、って事は、いつかはそうゆう関係になるの？」

あかねは巧みにスバルを追い詰めて行っているようだ。

「えっ・・・いやっ・・・。ってそうゆう問題じゃないでしょ！！」

「うふふ、すごく動揺したわね。やっぱり・・・。」

「いや違う！断じて違う！」

「それはミソラちゃんとの恋を捨てる事になるのよ？」

「だからっ！今話してるのは布団の事でしょ！！真面目に考えてよ！！」

「はいはい。うん・・・。」

本当に考えているのかな？と思いながらもスバルはなんとかこの状況のだから策を考える。

「うん……。うん、やっぱり……。これかな……。？」

「何？」

「僕は自分のベッドで寝て、ミソラちゃんは、母さんと一緒に寝る。これが一番セオリーだと思うんだけど。」

「ま、それでいいか！」

「うん、これで良いよ。」

「なんの話してるんですか？」

「あつ！ミソラちゃん。お風呂あがってたんだ。」

「うん。ついさっきね。それで、何話してたの？」

「母さんがミソラちゃんの分の布団を用意しておくのを忘れててね、誰がどこで寝るか話してたんだ。」

「へー。それでどうなったの？」

「スバルは自分のベッドで寝て、ミソラは私と一緒に寝る。とこんな感じよ。」

「分かりました。じゃあ私はそろそろ寝ますね。」

時計の針は既に十時を回っていた。宿題と格闘していた時にかなりの時間がかかっていたらしい。

「じゃあ僕も寝るよ。今日はかなり疲れたし。」

「はい。おやすみ、二人とも。」

「「おやすみなさい。」」

そして二人はそれぞれの寢床に向かった。

スバルは明かりを消し、ベッドに潜り込むと、ウォーロックに話しかけた。

「ねえウォーロック。」

「なんだ？」

「また、戦いが始まるんだね……。」

「そう……みたいだな。」

「僕はまた地球を、皆を救う事ができるのかな・・・。」

「わからねえ。・・・でも守らなくちゃならねえんだろ？お前が守りたい！！と思うなら俺はお前と戦う。俺はいつもスバルと一緒にだぜ！」

「うん！ありがとう。・・・あつ！そうだ。皆にメール送つとかなきゃ。えーと、ツカサ君とゴン太だよな。」

「ああ。」

スバルはメールを送ると、またウォーロックに話し掛けた。

「ねえウォーロック。明日、何言われるんだろうね。」

「さあ？でも、戦いの事なんじゃねえか？あの黒いものの事かもしれないね。世界各地に出現したんなら、それなりの情報もあつまってるだろうからな。」

「確かに。でもさ、いくらなんでも戦力が小さすぎない？バトルウイザードは大量に作れるけど電波人間よりは戦闘能力が低い。でもだからといって、電波変換できるのは、僕、ミソラちゃん、ツカサ君、ゴン太、ジャック、クインティア先生、あとは、多分協力しないだろうけどソロ。この七人しかいないんだ。暁さんももういないし・・・。」

「ふふふ、甘いぞスバル。まだ、八木とキャンサーのやろうと尾上が残ってるぜ！！」

「なっ！ウォーロックのくせに・・・。・・・でも、暁さんさえい

ればな。こうさ、曉さんがいると場が引き締まるんだよね。電波変換メンバーの中じゃ数少ない大人だし。」

『でも・・・あの自称ヒーローのナルシスト野郎が生きているとなると、解析ばっかの人工ウィザードのアシッドも生きている可能性が高いな・・・。』

「ウォーロックって本当にアシッドの事嫌いだよね。」

『あつたりめえだ！あんなの何処が良いんだよ！えっ！？』

「いや、そこは怒るところじゃないよ。」

『ああゝ！！俺はもう寝るぞ！！』

ウォーロックはそういうと寢床（ハンターV.G）に入ってしまった。

「そういうの、ツンデレって言う気がするんだけどなあ。はははっ、ははっ、ははははっ・・・・・・。さあゝて、僕もそろそろ寝るかな。」

こうして波乱に満ちた一日がやっと終わったのである。

第十五話 恥ずかしい朝

『うおーい！！起きろー！！！！朝だぞー！！！！今日
はWAXAに行くんだろ！！さつさと起きろー！！！！ついで
にお前大変な事になっているぞー！！！！』

朝、それは多くの子供が親に起こされる時間。

そしてスバルもその一人。ウォーロックに起こされている。しかし
ウォーロックには同情する。なぜなら毎朝スバルを起こすために大
声を出さなければならぬのだから。

「……………うええええええ！！！！…うわー！！！！
！！！！」

スバルはウォーロックの大声によって起こされた次の瞬間に自分に
大変な災難が降り掛かっていり事に気が付いた。その災難とは…。

「ミソラちゃん。なんで…くそ…」

『スバル…すまない、俺がもっと早く起きていれば、こんな事
には。』

スバルとウォーロックは何か変なスイッチが入ってしまったようだ。

「ミソラちゃん、なんでこんな事を！！」

『…………それは私が説明するわ。』

するとハーブがミソラのハンターから出てきた。今の状況を説明してくれるようだ。

「ハーブ！教えてくれ、ミソラちゃんは何故。」

『ミソラはスバル君を起こしに来たの。でも、ミソラ、まだ眠かったみたいで。それで、スバル君のベッドにダイブしてしまったの。ミソラには悪意は無かったわ、本当にごめんなさい、スバル君。朝っぱらからこんな災難にあわせてしまつて。』

その災難とは、スバルのベッドにミソラが寝ていてスバルが膝枕をしてあげているという状況だ。純情心を持つスバルには耐え難い災難だった。

その後ミソラが起きて、この状況を見てスバルに誤り、この事件（?!）は解決した。

着替えて、リビングに育と、あかねが朝食を準備して待っていた。大吾はすでに出勤したらしく、もういない。

「おはようスバル。」

「おはよう母さん。父さんはもう仕事にいったの?」

「うん。結構前に出たわ。スバル達も早く食べちゃいなさい。今日はWAXAに行くんでしょ?」

「うん。なんか話があるみたいなんだ。」

「そう。二人だけで行くの?」

「僕とミソラの他にも電波変換できる人が呼ばれてるよ。」

「そう。待たせちゃ悪いし早く食べちゃいなさい。」

「わかってるよ。」

ついでに言うと今スバルは食べながらあかねと話していた。

食べ物をお口に入れたまま喋るなよ!

と普通なら言われるが、あかねはそんな事を言わない。

どんな家族だよ!

という突っ込みが飛んでくる所だが、ここはあえてスルーする事にする。

しかしその後の数分間は全く無言。無言だった。食物をお口に入れたまま喋るのも駄目だが、全く無言なのはどうかろう。殺風景だ。気まずくてしょうがない。しかしそんなことは関係無いようでスバル達は黙々と朝ご飯を食べ続けていた。

そして・・・

「「「ごちそうさまでした。」」」

食べおわり、後片付けに入る。スバルは慣れたてつきで食器を台所

に持っていく。そしてスバルが持っていた食器はあかねとミソラが洗った。どうやらスバルが起きる前に二人だけで役割分担を決めていたようだ。そしてスバルが最後の食器を持ってきた。

「はい。これで最後だよ。」

「ありがとう、スバル。」

「うん。にしてもミソラちゃんお皿洗うの上手だね。」

「そりゃあ一人暮らしだったし。」

「スバルもちゃんとできるようになりなさいよ。」

「う！わ、わかったよ。」

「えっ！スバル君お皿洗いできないの！！」

「えっ！いやっ、その・・・」

スバルが戸惑っているとウォーロックが、

『スバルな、前に皿洗いした時に皿割っちゃまって指先ちよっと切っちゃったんだ。そうしたら皿洗いしなくなってな！！うひゃひゃひゃひゃ！！』

スバルをからかうように言った。無論スバルもウォーロックが喋っているときに止めようとしたが、ウォーロックはそんなのお構いなしに最後まで喋った。

スバルは部屋の隅に体育座りし、ひどく落ち込んでいる。よっぽど恥ずかしかったのだらう。顔を上げようとしな。

そしてウォーロックはハーブに飛び膝蹴りをくらいハンターの中で
のびている。

「スバル君。 なにもそんなに落ち込むことは無いと思うんだけど。
まあロック君は自業自得だね。」

ミソラはスバルに慰めの言葉をかけた。 ウォーロックに言った言葉
には、あかねもハーブも頷いていた。

起こす時はウォーロックに同情したが、今回はスバルに同情する。
家族はいいとして、ミソラに恥ずかしい話を暴露されたのだから。

その後ウォーロックが謝り、スバルはなんとか立ち直ったという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1045w/>

流星のロックマン THE FINAL COMET

2011年12月3日13時46分発行